

## 問われる「種」のあり方 「自家採種」が力ギ

映画「よみがえりのレシビ」で注目される在来野菜。地大豆や江戸東京野菜などの復活も広まっているが、伝承の鍵は「自家採種」だ。一方、私たちが食べる野菜の種は、今やほとんどが海外産生産で、一代限りのF1(雑種第一代)種だという。10月に安曇野パーマカルチャー塾が主催したシードバンク・フォーラムでは、100人ほどの参加者を前に野口種苗研究所の野口勲氏が、その絶望的な心境を吐露した。「もはや市場経済の論理では、その仕組みは覆せない」。せめて家庭菜園では、自家採種で受け継がれている固定種を育てて欲しいと力説した。

### 山梨県は有機の郷になれるのか

俳優・菅原文太氏が今、有機農業の推進に傾注している。それも県単位だ。「米国の7倍もの農業を使う大量生産大量消費の農業で、日本は田園ばかりか森も山も荒れ果てている」。そんな危機的状況に堪りかねたのか、10月に甲府市内で「やまなし発！有機・

### 平動休農という暮らし方

「市場経済の歪を市場経済の手法で解決することはできない」。「平動休農」というコンセプトは、アインシュタインの名言をもじった発想から生まれた。日本の食卓で安心安全が話題になって久しいが、不安の元凶は生産者と消費者の関係が市場経済でしか結ばれていないこと。更なる景気後退や大災害に見舞われて、その機能がマヒすれば、ライフラインとしての食料供給が危ういことは自明の理だ。ならば休日には農に携わって「自分内自給率」を高めよう。そんなキャンペーンが、都内で行われた平動休農フォーラムを契機にスタートした。主催する都市生活者の農力向上委員会では、来シーズン以降、田んぼのサポーター制度も展開する予定だ。

## 「人・農地プラン」とは何か

農林水産省は農地と経営の規模拡大に力を注いでいる。その切り札が「人・農地プラン(地域農業マスタープラン)」だ。地域・集落での徹底的な話し合いにより、自主的な農地の集約を促すのが狙いだとされる。確かにそれで経済が潤えば、農地を手放した小規模農家に手厚く報いることも



「人と農地の問題」を解決する一助になるか

## 「土と平和の祭典」、反対よりも実践を

たとえ遺伝子組み換え作物に異を唱えても、それを飼料とする家畜の肉を食べたいれば元も子もない。市場経済に依存し、その束縛から逃れられない消費者に、シフトの方向性を示すイベントが11月18日、東京・日比谷公園で開催された。答えは「農的生活をいかに取り戻せるか」だ。国民皆

できるのだろう。だが、景気浮揚が叶わなかった時、自給の手段さえ奪われた農村住民はどう暮らすのか。過疎化に拍車がかかることを祈る。

農を唱えた藤本敏夫氏の遺訓を受け継ぐべく生まれた「鴨川自然王国」、そしてこの「土と平和の祭典」。一人ひとりが変えられるのは、政治でもなく、社会でもなく、自分自身。だから今、大切なのは「反対よりも実践」。晩秋の温かな陽ざしに包まれて、出展者たちの笑顔が、それを促していた。